

在来かそれとも外来か？ニホンヤモリの起源に迫る



自然・環境評価研究部 系統分類研究グループ

太田 英利

ニホンヤモリ (*Gekko japonicus*; 図左) は 19 世紀初め、あのシーボルトが長崎で入手した標本が元となり、種として文字通り「日本の家守 (やもり)」として記載されました。ところがどうもよく調べてみると、1) 現在、人の身近に多く見られるにも関わらず文献上、鎌倉時代以前の生き物を取り上げた作品にその記述がほとんどない、2) 現在も民家などの人為的な環境以外ではほとんど見られない、などの理由からその在来性には疑問が出てきました。

そこで韓国や中国の研究者とともに分子生物学的手法で日本国内の各地の集団と、大陸中国や韓国の集団 (図左中) とを比べたところ、ミトコンドリア DNA の塩基配列を指標とした比較 (図右中) からも、また核 DNA のマイクロサテライトに基づく解析 (図右) からも、それぞれの地域間での遺伝的分化はほとんどないこと、いっぽうで中国の集団は遺伝的多様性が特に高く、日本の集団が続き、韓国の集団では遺伝的多様性は限られることもわかりました。

以上の結果からニホンヤモリの在来分布地は中国東部で、日本のものはおそらく有史以降に人為的な要因で繰り返し移入されたものに由来する古い外来集団、韓国のものはより新しい外来集団であることが、強く示唆されました。環境省は生物多様性保全の観点から問題にされる外来種の定義を、明治期以降に国内に持ち込まれ定着した種に限っていますが、今後、ニホンヤモリのような“より古い外来種”をどう扱うかが、大きな問題になりそうです。

